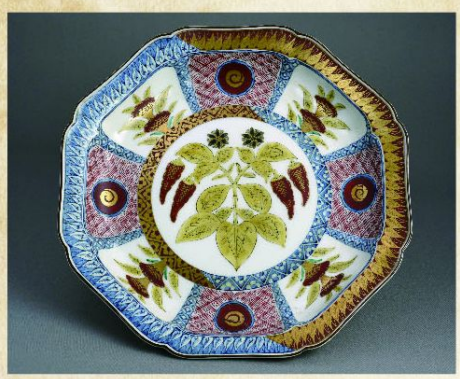
かつて金澤は
九谷焼産地であった。
展
～九谷名工は
金沢にあり～
7月6日(土)～9月2日(月)
10時～19時 《金曜～月曜 開場》
入場無料
SANKI BUNKO

「かつて金澤は九谷焼産地であった。」

展 ～九谷名工は金沢にあり～

明治前半に海外のジャポニスム熱のおかげで日本の工芸界は息を吹き返しましたが、それが過ぎると輸出は低迷し、再び国内に眼を向けなくてはなりませんでした。九谷焼も旧来の焼物から近代日本の趣味と感覚に訴える制作が求められます。この時期には近世以来金沢市内(東山一帯や野町)に窯を構える作家や窯元が数多く活動していました。彼らは九谷の技法を引き継ぎつつ、新しい形、器、デザインに挑戦し、互いにしのぎを削っていました。戦後になって生活環境が激変し、焼物も展示品としての伝統工芸の世界に閉じこもり、人々の生活から離れてしまいました。本展では、九谷が市民の生活や趣味のなかで生きていた時期の作品をいまひとたびご覧いただきたいと思います。秘められた可能性と挑戦の意気は今もなお我々に響くものがあると信じます。


1

2

3

4

5

6

◎ アフタヌーンティー・トーク(参加費500円　飲物付き)

●7月20日(土) 午後1時30分より

『伝統世界の革新者たち―金沢九谷の実相』山崎達文(金沢学院大学教授)

明治末にジャポニスムが終焉して以降、九谷焼は国内の愛好家たちをターゲットとし、伝統技法を用いながらも、新しい時代感覚、美意識に訴えかける作品を世に送りだします。技巧を凝らしつつ洒脱に美しく仕上げられた作品を生み出した作家たちの活動とそれを育んだ背景をご紹介します。
お話の後で、戸出雅彦(作家)による展示作品解説を行います。

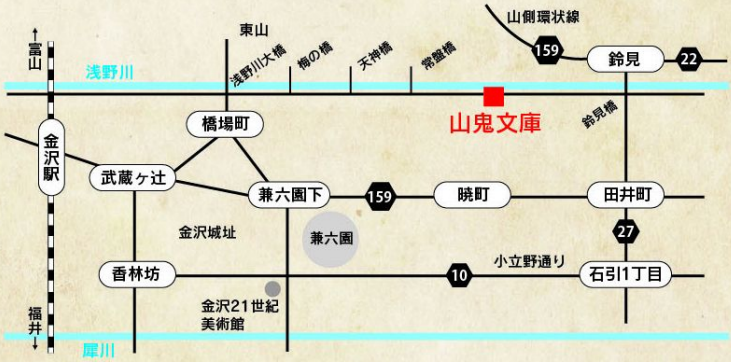
●7月27日(土) 午後1時30分より

『金沢九谷の伝統とは？』森仁史(山鬼文庫代表)

九谷焼は確かに近世に作られましたが、同じ窯場では作り続けられなかった産地です。近代になって焼物は国際市場での評価が高まり、作り手は九谷の技法に自信を深めます。このように、作者や訴えようとした担い手が変わったにも関わらず、なぜ伝統を誇ることができるのでしょうか。この伝統と革新のメカニズムを解説します。
お話の後で、戸出雅彦(作家)による展示作品解説を行います。

7

1.戸出雅夫「色絵唐辛子図尺皿」／2.戸出政志「釉裏銀彩香炉」／3.初代中村梅山「陶漆蒔絵菓子器」／4.由良孤舟「菊花文鉢」／5.雪花堂「百合盃」／6.生山画、清山書「黒田製湯呑」／7.石野竜山「藍釉蓬莱山華瓶」

山鬼文庫は、浅野川辺りの静かなブックカフェです。
穏やかな川辺の眺めに憩ってみませんか。

山鬼文庫 金沢市桜町5-27　tel.076-254-6596　http://www.sankibunko.com/